すっかり見ちがえる程たくましくなって立っていました。といっても、すぐにときちゃんだとわかったわけではなくって、私は港湾関係の知人がいたかしらと考えたすえにはっと思いあたったわけでしたが。　彼は市立の中学を出るとすぐに、お父さんと一緒に港で働きはじめたので、高校から大学へと進んだ私とはもう五年も六年も会っていなかったのです。

私は、

「ときちゃん？　えーどうしてた、元気：　だろうね、それじゃあ」

といってから、すぐにいろんな思いがごっちゃになって何も言えなくなってしまいました。

「おれ、すぐわかったよ、いまっころこいんな死にかけた川のそばでぼーっとしているばかはおまえくらいのもんだろうってさ、やっぱりだ」

そういってから、しばらくやはり黙っていて、ポツリと、

「おれんち、陸にあがったよ」

といいました。　そして、

「いくか？　仕事はもうやめた、今日の分断わってくるから待っててろよ」

と言うが早いか、ときちゃんはどっかへはしっていきました。　私はまだボーとして、冷たい風とあたたかい日指しに何がなんだかわからなくて、

「ときちゃんのはしけ」

とぽつりと口に出してみました。　それはなぜだか、海賊につながる胸さわぎと埋立てられた川の無残な姿に対する怒りとを内包しているようでした。

もどって来たときちゃんは、色の赤黒いサーフィン少年といったふうで、つい、さっきまでの板についたカもちの労働者といった面影などちょっとも見せていませんでした。　私はこんどこそほんとにびっくりして、

「どうしたの」

とききました。

「近頃の土方はおしゃれなんだよ、まさか地下タビで街に出ると思ったわけじゃないだろうな、まったくおまえは非常識だ」

と、じろりとこわい目で私をにらんで答えにしました。

「家は借家だけどおやじとおれが働いているからな、けどな陸に上ったカッパさ」

とセルフサービスのサンドイッチやさんに入ってすわると、ときちゃんがいいました。

「私ね、川が埋られるのやだよ」

と私は脈らくもなく言いました。　すると、

「まあな、でも、はしけはもういらないんだぜ、港によ新しい機械が入ったんだ」

と吐くように言ったときちゃんは、

「けどな、人間はいいよ、陸でだって生きてられるんだ、かあいそうなのは魚さ」

と続けました。　そうきいたとき私は、この間からしきりに頭の中にこびりついている画像をまた瞬間に見出していました。

それは、川の面にピチョと銀色の小魚がいくつもいくつもとびはねて、小石を投げたときにできる波紋と同じようなものを描いている状態でした。　たくさんの魚が、川の最後の所に残っているんだ！　混んでいるからとぶんだ、と私は思いました。

「そうか、気付いたのか」

それをときちゃんに伝えると、

といってから、

「これは断固おれの空想なんかじゃなくって、確かにあったことなんだよ、信じ

ようが信じまいが勝手だけどさ。」

そういって話しはじめました。

それは確かに不思議な話でした。

ときちゃんは川の中へ入ったというのですから。

しかも、潜水っていうのじゃなく、私達が小さかった頃にナルニアの物語をよみふけったりしたあんな感じでくるくるとーつの川の国とでもいうのでしょうか、そんな世界へと行ってしまったというのでした。

「もう一週間かそこらで陸に上るっていう頃だったな、一人ではしけに残ってながらあんとした船底で寝てたんだ。

ってそうだよな、おれが二十年近くも育ってきた家だったんだぜ、そんなにかんたんに出られるもんじゃない。」

そういってはじまった物語です。

その頃には川はもうすっかり埋立てることを決められていて、その上の公園計画なんかが言われ、高速道路の基礎打ちもはじまっていました。

ときちゃんはタポタポという船にあたる夜の音をききながら、どこにもやりようのない淋しさとひどい憤りをかかえてじっとしていたその時です。

何かピシャピシャとぬれたものが近ずいて来る音がしたのだそうです。

何とまあ、それはちっちゃなときちゃんの目の前で口をパクパクあけながらしきりに目をきょろつかせていたのでした。

ときちゃんは全く健全な普通の男の子なわけですから、おとぎ話なんてぜんぜんけれどその時まで信じませんでした。

そしてつかまえようとしたとび も、手を出してはぜがずずんと大きくなって自分と同じくらいの大きさになり口をきいたとあってはぜで、何とも考えようがありませんでした。

その上おどろいたことには、畳のへりが広くなっておりましたのではぜが大きくなったのではなく自分が小さくなったのだということにまで気がついてしまいました。

とびはぜはきっちりと日本語で、「苦しくてかなわんよ、空気の中というものは、早く水の中へ帰ろうや、そんなにばかな顔をするな、事情はあとだ」といったと思うと、ペタペタと板の間にある排水管の方にはってゆき、「はやく来てくれ」というなり、待ちきれずに水の中へと、

ポチャンとおちてゆきました。

ときちゃんはちょっと考えて一人では元の大きさに戻れないということに気ずき、ええ、ままよ、とばかりはしりよってその今は大きくトンネルのように口を開けている排水口へ入り、おそろしくまぶしい光の中へ思いきって飛びました。

体が小さくなっているせいか、思った程の衝撃もなく『華麗なフォーム』でへとときちゃんは言いました)着水したのでした。

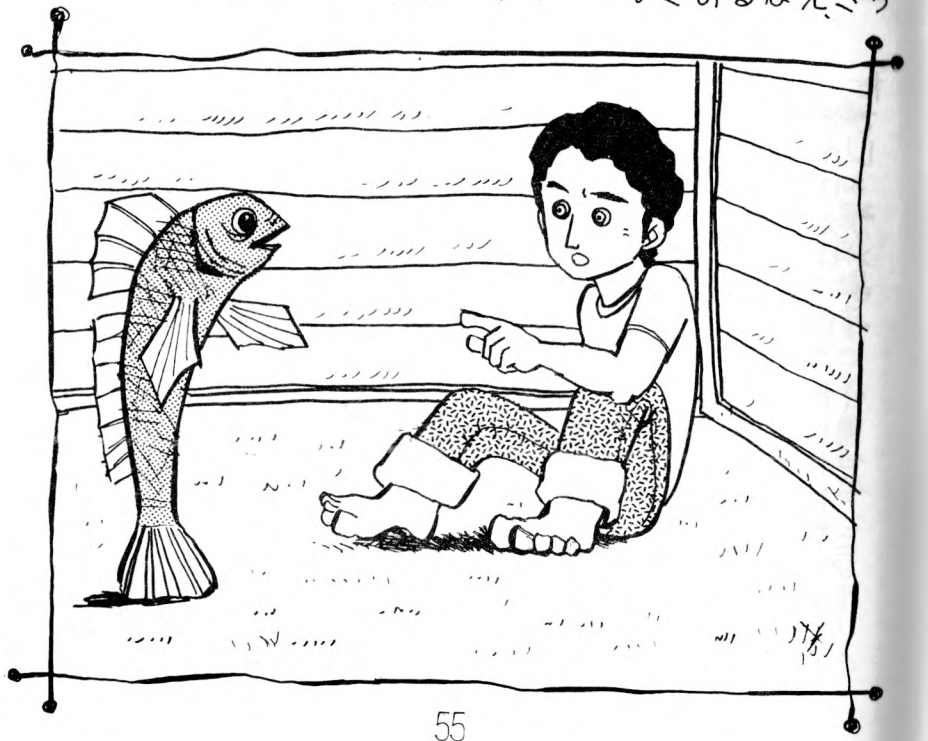
さぁ、泳ごうかと思ってバタバタとしてみたところが、どうも妙です、ブクブクと体が沈みます。

下ではとびはぜが、多分さっきときちゃんを迎えに来た奴だろうと思いますが、小さなあわを口からブクブクさせながら笑っています。

ときちゃんはあんまりあわてたもので水をガボッと飲んでしまい、それから、ここがあのきたないどぶだったことを思い出してきぶんが悪くなってしまいました。

が、不思議なことにまったく息苦しくありません、まるでカメのせなかに乗った浦島太郎のように水中でらくらく呼吸をしていたのでした。

それで少し落ちついて、まわりを見る余裕がでたの



です。　外で人間の目から見た時にどんよりとしてきたない色の水――水彩絵具の十二色全部をふでにつけて水洗いしたときのような――が、まるでエメラルドのような緑なのは、どういうわけでしょう。

「おい、行くぞ」

それだけ言うと、さっきのとびはぜはもうさっさと下の方へ向って泳ぎ出しました。　ときちゃんはあわててあとを追って遅れをとらずに進みはじめました。それは普段歩いているのよりずっと楽な感じで水の中をもぐってゆけるためでした。　底の方には、何やらわけのわからないかたまりに水あかやらごみやらがびっしりとつもって、でこぼことしています。　そのうちにうすぐらくなって来て、大きな土管のようなあなの中にとびはぜは入っていったのです。　何だろうと思いながら後に続いたときちゃんは、中が暗かったため一瞬何度もまばたきをくりかえしました。　すると、

「ようこそ来たな、まあ見てくれ」

と、はぜとはちがった太い声がいったのでした。　それは大きなぼらでした。そしてそのぼらは、ようするにそこの王さまというか親分というか、そんな地位にいるようです。　そして、ときちゃんに訴えたことは、住みなれた平和な世界がこわされてゆくことと、我々が移民できるようにはからってもらえないかということが主でした。

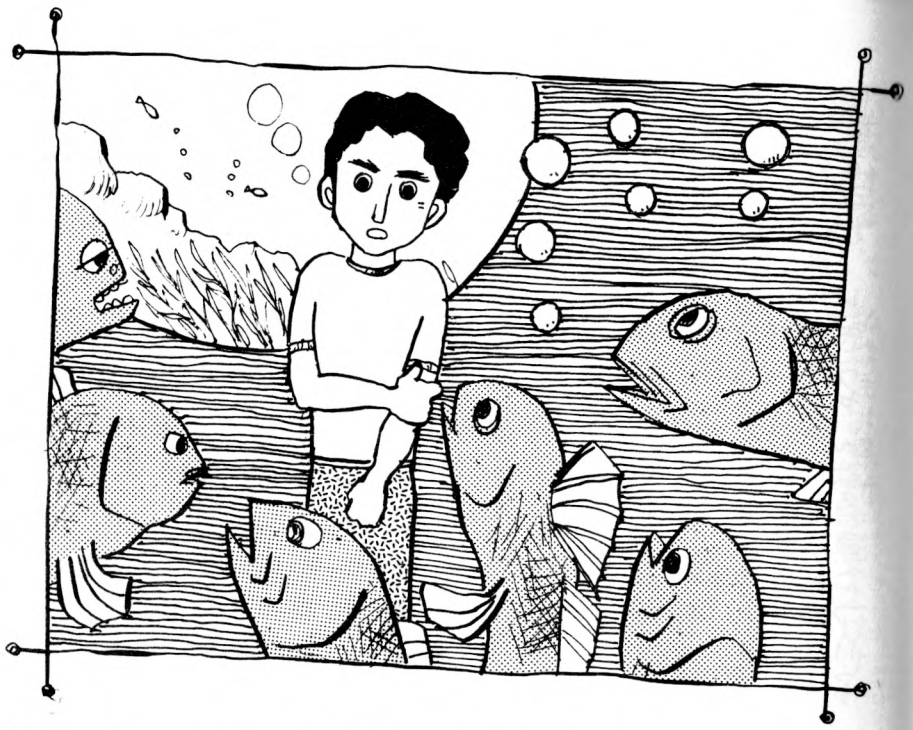
確かに、その世界は素適だっただろうことは長年にわたり――生れたときからですもの――その河の水面に住んだときちゃんはとてもよくわかりました。　けれども、当のときちゃんでさえ、その河をはしけをすべて出てゆかねばならないのです。　そんなことを考えていると、

「それでも、われらはまだいい方だ。もうすでに、どろの下に埋って化石になるのを待っている連中もいる。　それから、卵を生みにくる昆虫達などはもう他にどこへ行けというんだい。　それから、海に住める連中も少しはいる、少しはな」

そんな声がみみに入りました。

「人間はえらいんだというものは魚の世界にはおらんよ、ずるいんだ、してこの河はいったい何になるんだね」

そういえば、いったい何になるんだったでしょう、そう、公園だった。



「新しい野球場をつくるんで、まわりもきれいにしなければという計画なんだ。公園になるという話をきいたよ」

と、ときちゃんが答えました。　すると、魚たちは、

「きたないってのかい、この河が。　確かに一時期は工場の水やなんかがまじっていたけれど、いまのこのきれいな緑の色をみて欲しいね、水だって生きている物だ、僕らの口に入ってくる小さな生きんだ、僕らのようよとしているんだからね」

と、ときちゃんをまるで人間代表のように思っているのでしょうか、抗ぎをはじめました。

「まあまあ、この人は文句を言われるために来たのではない」

とぼらの親分が横あいから助けてくれました。　そして、

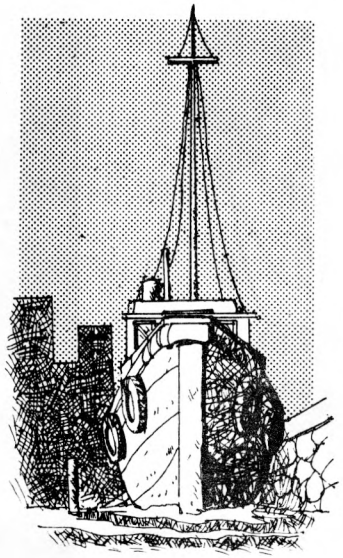
「なわばりっていうもんは人間にはないのかね」

とききますので、ときちゃんはやくざのなわばりっていうのはあるなあと思ったのでした。

「あるのかい、魚たちにはそれぞれにお互いを殺さない程度の住みかの広さを主

張できる。　そして食べるえさのちがう者や起きている時間のちがうものは、同じ所に住んでいてもかまわないというきまりがあるんだ。　それを人間に解らせることはできないかねえ」
と相談をされた形になりました。　ときちゃんは一生けんめい考えましたが、ときちゃん一人がいろいろ言っても他の人間達は、
「緑を増やすのがなぜ悪いんだ」
というにきまっているような気がして、ゆうつになりました。　ぼらには、何とか頑張ってみると約束はしましたが：：だってそうでしょう。
「ぼら達より人間であるおれの方が強いのだから、少しは考えてやらなきゃよう、魚同志でだって弱いものことを考えているのに」
と、ときちゃんがいったのが私にはひどく印象的でした。
ほんとうにそうなんだ。　なんで、こんな簡単なことが忘れられちゃうんだろう。　だって、海にも住める魚は川にも住めない魚が生きてゆけなくなるのを心配するし、ときちゃんは魚達について

心配するし、私は住み場所を変えなければならないときちゃんのことを思うんだ。これは皆、あたりまえのことなはずなのに。　私はそのときからこんな想いが心を離れません。
それでそのあと、ときちゃんは貯木場という材木が水にういている、河と海が接しているあたりまでをさいしょにであったはぜに連れられて見にゆきました。もう二度と見られないその水の中の景色を。
「うれしかったよ、いねむりしてたのかもしれないけれど夢でもさ、魚達は真険におれをたよってくれたろう、河に住む人間として仲間だと思ったんだ。　信じねえだろ、こんな話」
それなのに、今は：：：と、ときちゃんは悲しそうでした。　だって、働く仕事は海の上ではなくて、大好きな河を少しずつよその山から持ってきた知らない所の土でうめてゆく仕事なのですから。
「人間ってよ、大してかしこくもないし優しくもないもんなんだなあ。期待してたんだけどな、おれ」
そういってビンのコーラを飲みきってしまったときちゃんは、
「まあ、明るくやるさ」
といって、
「行こ、行こ」
と私を街へ連れ出しました。
人々は忙がしげに行き来して、一つの川が死んでいこうとすることさえ知らずにいる通りの様子は、冬の日溜りのうそっぱちの暖かさにたっているような気がしたのでした。　一歩日かげに入るなら、冷たい風のふきさらし、やっぱり季節は冬なのでした。



おしまい

もみの木さん

いとゆりあ

私がもみの木さんと会ったのは、クリスマスに近いある日曰日のことでした。町には、ジングルベルや諸人こぞりての鐘の音があふれかえり、赤いリボンで吊り下げたアドベント・クランツに三本目のキャンドルが立つその日でした。

私は、教会にも行かず、家でのんびりしていて、午後から本屋さんへ新しい本が入ったか偵察に行って来た帰りのバスの中でした。

「うわぁ、日曰日は混んでるなぁ。みんな、デパートの大きな紙袋下げて、きっとお歳暮だ。」

始発から三番目のバス停から乗った私は、比較的空いているうしろの方に座ってそう思っていました。そして、だんだん混んで来て、また次第に空いてきました。

「あれ？クリスマスツリー誰か持っているのかな？」とキョロキョロしたけれど、それらしい荷物を持った人はいなくって、私の前に立っ

ていた二十才くらいの男の人が、私の方を不思議そうに見ていただけでした。私もその人のことじいっと見ていると、どっかで会ったことあるなって思ったんですよ。すると「何か探しているの？　誰かと同じバスに乗る約束？」ってその人が言いました。

「うん、そうじゃないの、おかしいけど、もみの木の匂いがしたから……」と答えると、その人は、にっこり笑って、「ああ、それ、僕だよ。きっと、だってね、先っきまでたくさんのもみの木を運んでたんだから。」と言ったのです。

私は、勝手にその人をもみの木さんと言いました。もみの木さんの仕事はお花屋さんで、ガーデンセンターという所で配達をしているのでした。

その時、バスのテープレコーダーが「つぎは小港、こみなとです。」と流れました。

私はびっくりして「あ、いけない。ニつも乗り越しちゃった。」と、あわてると、彼は、「よし、君の家まで行ってあげる。今頃は、もう薄暗いからね。」そういって、一緒に小港で降りてしまったんです。

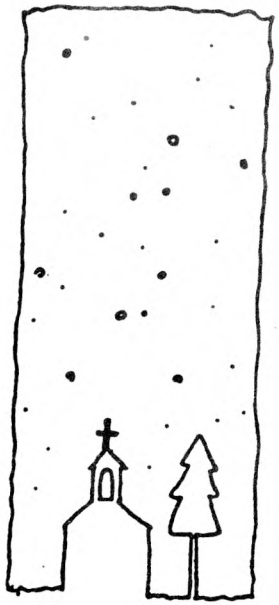
私の家に向って、川っぷちを歩きながら花の話や、いつも配達に行く家の話、それから一つ約束もしました。クリスマスには、もみの木を――小ちゃいのがいいね――持って来て庭に植えてあげる。だから他から買っちゃだめだよって。

一人で歩いたら、とっても遠い停留所は、すぐに歩いてしまったのでした。うちの前で「じゃあ、またね。僕の毎朝乗るバスは、六時四十八分だよ。ちょっと早いけれど、時々会いたいね。Good-morning!」と言って、目がねをかけたもみの木さんは、手を振って走って行きました。

その夜、私は、この頃とてもきれいに見える星を、寒いのをガマンして見ながら、毎年一緒だった友人達は来ないけど、もみの木さんと教会のクリスマスに行ってみようかなぁ。あの人は讃美歌を知っているかしら？　明日はダメだけれど、あさっては六時四十八分に乗るんだ。

などと、いろいろ頭に浮かべて、ひどく暖かい気持ちで髪――少しの間、もみの木さんのそばにいたから、匂いの移った――髪をひっぱったりしていたのでした。

おしまい



夏至の夜には

いどゆりあ

その夜は、しんごが小さかった頃から、夏になったらいつだって感じていたにおいを、この年はじめて感じた日でした。

しんごはこの間の日曜日、おとうさんとおかあさんが子供っぽすぎる部屋を模様変えしてからは、何となくとても大きくなったような気がしていましたが、だから、きょうも早くなんかぬいで、ゆかまで開いている大きな窓を細めにあけて鼻をつき出し、くんくんと空気のにおいをかいでいたのです。外は湿ってはいましたが、まっ暗なゆにポンヤリと青紫色のあじさいがもりあがって見えておりました。涙がでもう一度、鼻をひくつかせると、そうになつかしい蚊とり線香のにおいだって、混っているのがわかりました。つゆの間だったので、きのうの縁日は雨でつぶれてしまいました。

「花火やりたいなあ」

今夜は夕方になってからしとしと降り続いていた雨があがり、ぐんぐんと

温度があがって、それはそれはきれいな夕焼けの見られた、気持のよい宵でした。

「こんな日に花火やったら、虫のかれりになるのに」

しんごは、こんな夜が大好きだったので、先っきおかあさんがスタンドの明りをみつけて、

「早く寝なさい！」

と大っきな声でいった時だって、パチンとスタンドを消しただけで、パジャマのままゆかのざぶとんの上に腹ばいになって、まどから顔をだしたままでした。

そうしているうちに、きっとうとうとしてしまったにちがいありません。家の中はしいーんと静まり返っていました。ふっと目を開いたのは、風のせいだったのでしょうか？いいえ、かさこそ、かさこそ、何か聞える様な気がします。しんごは、いっしょうけんめい耳を澄ましてききました。

「机の上からかな？」

はたしてその音は、机の上におかれた広口びんからのようでした。

電気をつけたいけれども、もしおかあさん達にみつかったらたいへんです。そおっと、つまづかないように、つま先でゆかをさぐりながら机に近づきました。たちひざでびんをのぞき込みました。そのびんの中には、きのう学校の理科の時間に、先生が、

「観察日記をつけなさい。外でみんなといっしょにとってきたカたつむりがらひき入っているのでした。

あじさいのくきや葉っぱやらに思い思いにくっついたかたつむりは、ゆっくりと動きながら、何事かブツブツとしゃべっているのです。

しんごはびっくりぎょうてんしました。だって、だあれもしんごに、

「かたつむりはしゃべります」

と教えてなかったのですから。

「あの、あの――」

とびんの口にわごむでとめてある、穴

を開けたサランラップを大急ぎではがしながら、かたつむりにこっちをむいてもらおうと話しかけました。

パタッと音がやみました。まわりは光源のはっきりしない、ぼんやりとしたくらやみです。

しんごは、うんと小さいこえで、

「こんばんわ、じゃましてごめんなさい」といいました。

でも、かたつむりは何も答えません。頭は、からの中にひっこみそうです。それを見て、大人が知らない人と会った時、何ていうかしらと、いっしょうけんめい考えたあげく、大急ぎで、

「はじめまして、私はよしおかしんごという人間で、小学校の3年生です。ええと、今まであなた方が噂れないなんて思っていて、本当に失礼でした。よろしければ、ぼくもお話に加わりたいのですが……あの――」

いちばん殻の茶色っぽい、大きいかたつむりが、にゅうと頭を出しました。

カシ・カシッと何ぞ言ったようですが、小さな音すぎてしんごには分りません。

「あ、そうだっ」

しんごは大急ぎで、おもちゃ入れにとんでゆくと、(ざぶとんにつまづいてどてんとひっくり返りはしましたが)おもちゃの聴診器をひっぱり出してきて、広口びんにあてました。

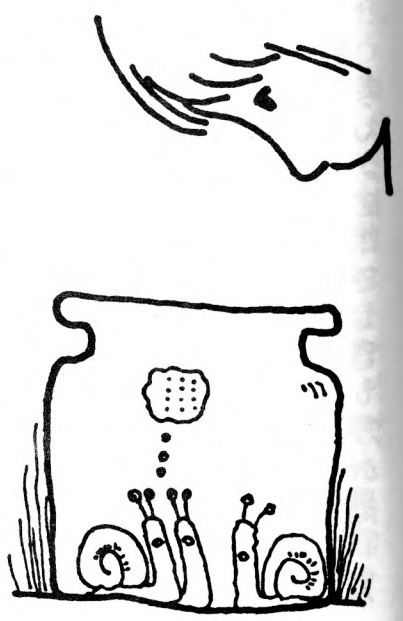
すると、何ということ。かたつむりは、かたつむり語ではなく、人間のことばでしゃべっているではありませんか。

「ふっふっふ、何とも面白い子だね。しんごくんは……それに君は、よくしたことにかしこげだ」

かたつむりが笑いこけている声が、3重くらいに重なっているのをきいて、しんごは、ぷっとふくれました。

「いや、ごめんよ。君、あはは……大人のまねなんかするからさ。おかしくて……」

ゆっくらいでからにしまのある衣が葉っぱの上をするするとこっちに滑り



「ながらいいました。

「しかし、しんごくん、君はよく、我々の声がきこえるの？」

と同じかたつむりが、じいっとのぞき込んだ。しんごにききます。

「うん、ちょっとうしんさがあるからね」

「ふうん、じゃあ、ふつうの人は話し声を葉っぱをなめる音くらいにしか思ってないのか」

さっき、最初にしゃべった、からの大きなかたつむりは、少々考えていたようでしたが、

「しんごくんとやら、君は、我々の事を知りたいかね。今夜は、ちょうど我々の中でも、祖先の話をみんなで確めあって、まちがった所を除き、正しい歴史を伝えるための話しあいの日じゃが。一緒に聞かないかね」

しんごは、すかさず、こくりと首をたてにふり、次にそれでは心配なので、

「はい」

と答えて、

「せひ、おねがい……」

とつけたしましたので、またかたつむりは大笑いです。

「最初」

と大きな茶色のかたつむりが、めだまを片っぽずつ、たがいちがいに動かしながら言いました。

しんごは自分のベッドの上にあり、しんごはしんごのひざの上にあり、しクッションのようにしてすわっていました。

「我々がこの星に来たのは、どれ程の昔か。まだ海ばかりで、何やら小さ

な生物。そう。人間の目にはみえないだろうて。しか泳いでおらん頃だった。」
この星？
しんごは、びっくりしてききました。
「この星って、地球？」
「ああ、そうだ」
とってもちっちゃい一ぴきが、片目で答えました。
「先祖の星は、空に光る赤い星。以前は、海もあったもの。我らは、岩をくり抜いた水槽に入って、落ちて来た。――と伝っておる。」
「知ってる。火星だ。火星人がいた？」
興奮して、しんごはしゃべりはじめた。
「たこみたいな火星人？　ぬえ、えんばんはないの？　怪獣はいない？」
「いいや。それは君達の考え出したこと。ぼくらの先祖が、火星人なんだ。火星は昔、太陽がもっと若かった頃には、とても美しい星だったよ。」
しんごは、がっかりしてしまいました。
考えるだけでもきもちの悪い火星人がいなくなってしまったし、かたつむりが、火星の海(!)の中をはいまわっているのを思い浮かべたので。
しゅんとしていると、かたつむり達は話を進めます。
「さいしょは、地球のしょっぱい海の中にいた。大きな、ピンクのかたつむり。永い年月、姿は変わる。我らの仲間は、アンモナイトになり、そして、ずっと海の中にいるものは、イカ。イカは、から。やっぱりとなった。しかし、を背負うのをやめたがった。今もってやめられずにおる。彼らには先祖に対する尊敬など、かけらもないからな。それでも、体の中に、たい殻の名ごりをとどめずにはおかないのだ。」
「え？　いかって？　あのすみをはくいかなの？　君達とおんなじ仲間？　貝はね。わかるよ。あ、そうだ。ぼくね、貝やら海の生き物がたくさんでてる図かんを持ってるよ。みせてあげる。」

「ふうん。でも君はまだ、軟体動物って分類されている動物が、何かなんて知らないわけだ。」
と、ちょっとバカにした様に小さなかたつむりが、頭にあるつのをゆらゆらさせながら言いました。
「そして」
と、それを見にもとめず大きいかたつむりは続けます。
「そのうち、陸の上に生き物が続々上がりはじめたのだ。地球で生まれた生き物も。そして、我らの仲間も。ただ地上には、水がないので、体がかわいて死んでしまう者達が大勢いた。ずいぶん年がたってから、我らは、体からねばねばを出すことを覚えた。そうすれば、いつもかわかないですむからな。」
「へえ、そうなの。」
しんごは、感してききました。ふしきな話です。ピンクの大きなかたつむりが、海の中にいたというのです。
「そして、今の我らは、最初にこの星に来た者達に、いちばん近い体をしているというわけだ。」
とくいそうに、しまのある奴が言って、体をにゅうっとまた伸ばしました。
ピンクのかたつむり……海の中の……
しんごは、どっかで知っている様な気がします。
確かにきいたんだよ……
「わかった」
えへと、えへと、この間
大きな声を出したので、かたつむりたちは、みんなびっくりしてきゅんと
「そうだ。そうだ。ピンクの大かたつむり。」
「そうだ。ドリトル先生の本にでてきた
古い時代から生きている大海かたつむり。」
しんごはもう、うれしくってたまりません。はしゃぎまわって、本棚の方へすっとんでゆき、またぶとんにつまづいて、ばったりところびました。
しんごはとくいに、えへへ、えへへ、
かたつむり達がその話をきさたがり、いいながら、おとうさんに買ってもら

った「ドリトル先生航海記」の話をしました。

その話が終った時、かたつむり達は泣きました。

「我々の古い仲間は、深い深い海の底にもとのまま、生き延びているかもしれないんだな。けれども、われらと来たらどうだ。もう二度とその祖先に会えはしないじゃないか。悲しいことだ。」

しんごには、何が何だかわかりません。

「どうしたの、ドリトル先生の話は。」

「悲しくなんかないよ。おかしいなあ。」

「そうじゃないんだよ、君。僕達は大海かたつむりに会いたいんだ。」

「ふうん。じゃあ、僕、海につれてってあげようか。君達を。」

と、いって、ちょっと考えてから、大急ぎで、

「観察日記をつけ終ったらね。」

と、つけたしました。

大きなかたつむりは、

「それは、できないよ。我らの体では、海の中は耐えんのでね。」

と、悲しそうに言います。

それをきいて、しんごは同じくらい悲しい気がして、

「どうしてなの？　なぜだめなの、僕君達を逃がしてあげろよ。海の底ついたら、他の動物に大海かたつむりのいばしょをきけばいいよ。ね、きっとしってるよ。ああ、潜水艦があったらなあ。僕もいっしょにいけるのに。」

と、いいました。

「いや、君は、なめくじというのを知っているだろう？　今の我々にいちばんちかい兄弟だが……」

「ああ、しってるよ。あのさ、おかあさんが大嫌いなやつでしょ。キャアーなんていって、しんごくん、はやくお塩持ってきて。はやくはやくーって いっもいうもの。」

「そうだ。あいつは、我々のからのようなのを、持っていると思うかい？」

「ううん、ないよ。」

「けれど、本当はね、イカと同じで体のゆにはあるんだよ。」

と、小ちゃいのが口をはさみました。

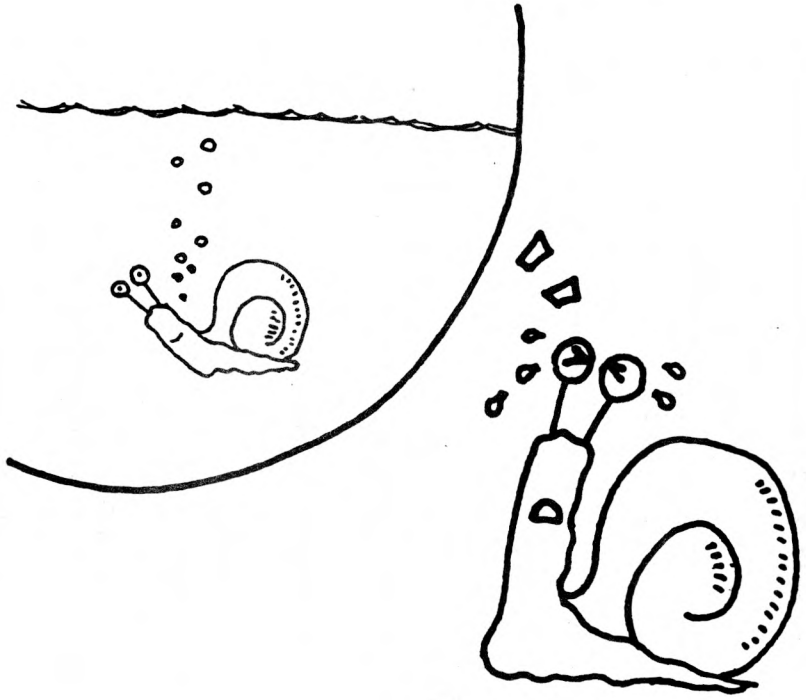
「あれに塩をかけると、どうなるね。」

「ええと、何っていったらいいんだろうなあ。あ、そうだね。とけちゃうんだ。くにゃくにゃって、小さくなって いくよ。それで、しんみたいのしか残んない。」

「そうだろう。じゃあ、我々が海に入ったらどうなるね。君はかしこいからわかるだろうに。」

「そうか、海の水は、お塩なんだね。君達は行かれないのか、でも不思議だなあ。だって昔は、海に住んでいたんでしょう？」

「ああ、昔も昔、果てしない程の古いことだ。人間なんてどこにもおらず、まだ魚だって、かたいからでくるまれていた。」

「ふうん。」

しんごにはよくわかりません。